日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごしよ

四條金吾殿御書

新版
1513
〜
1515

しじょうきんごどのごしよ

四条金吾殿御書

ぶんえい ねん がつ にち さい しじょうきんご

文永 8 年 (71) 7 月 12 日 50 歳 四条金吾

ゆき しろう そうろうはくまいいっと ふるざけ そうろうあぶらひとつつ

雪のごとく白く候 白米一斗、古酒のごとく候 油一筒、

おんふせいつかんもん ししや ほんりようおく た そうろう

御布施一貫文、わざと使者をもつて盆料送り給び候。

こと おんもん おもむきあ がた おぼ そうろう

殊に御文の趣有り難く、あわれに覚え候。そもそも

うらぼん もう みなもと もくれんそんじや はは しょうだいによ もう ひと

盂蘭盆と申すは、源、目連尊者の母・青提女と申す人、

けんどん ごう ごひやくししようが きどう 墮 たま そうろう もくれん

慳貪の業によりて五百生餓鬼道におち給いて候を、目連

すく ことお そうろう ほとけ

救いしより、事起こりて候。しかりといえども、仏には

成 ゆえ わ み ほけきよう ぎようじや ゆえ

なさず。その故は、我が身いまだ法華経の行者ならざる故

はは ほとけ

りょうぜんはちかねん ざせき

に、母をも仏になすことなし。靈山八箇年の座席にして、

ほけきょう たも なんみやうほうれんげきょう とな たまらばっせんだんこうぶつ

法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱えて多摩羅跋梅檀香仏と

たま とき はは ほとけ たも

なり給い、この時、母も仏になり給う。

せがき おお そうろう ほけきょうだいさん い

また施餓鬼のこと仰せ候。法華經第三に云わく「飢え

くに きた だいおう ぜん あ

たる国より来つて、たちまちに大王の膳に遇うがごとし」

うんぬん もん ちゅうこん しだいしようもん だいご ちんぜん 音

云々。この文は、中根の四大声聞、醍醐の珍膳をおとに

聞 こんきょう きた はじ だいご あじ 飽

もきかざりしが、今經に來つて始めて醍醐の味をあくまで

嘗 むかし飢 こころ 止

になめて、昔うえたる心をたちまちにやめしことを説き

たも もん がきくよう とき もん じゆ

給う文なり。もししからば、餓鬼供養の時は、この文を誦し

て、南無妙法蓮華經と唱えてとぶらい給うべく候。
なんみやうほうれんげきやう とな 甲 たも そうろう

総じて、餓鬼において三十六種類相わかれて候。その
そう がき さんじゅうろくしゅるいあい分 そうろう

中に鑊身餓鬼と申すは、目と口となき餓鬼にて候。これ
なか かくしんがき もう め ぐち がき そうろう

はいかなる修因ぞと申すに、この世にて夜討ち・強盜など
しゆいん もう よ よう べうとう

をなして候によりて候。食吐餓鬼と申すは、人の口よ
そうろう じきとがき もう ひと ぐち

りはき出だす物を食し候。これも修因、上のごとし。ま
吐 い もの しよく そうろう しゆいん かみ

た人の食をうばうにより候。食水餓鬼というは、父母孝養
ひと じき 奪 そうろう じきすいがき ふぼ こうやう

のために手向くる水などを呑む餓鬼なり。有財餓鬼と申す
て む みず の がき うざいがき もう

は、馬のひづめの水をのむがきなり。これは今生にて財を
うま 蹄 みず 餓鬼 こんじやう たから

惜じき 隠いん ゆえ むざい とう

おしみ食をかくす故なり。無財がきと申すは、生まれてよ

このかた おんじき な 聞

り以来、飲食の名をもきかざるがきなり。

餓鬼

じきほう もう しゅつけ ぶつぼう ひろ ひと われ ほう

食法がきと申すは、出家となりて仏法を弘むる人、我は法

と ひとそんけい おも みようもんみようり こころ

を説けば人尊敬するなんど思いて、名聞名利の心をもつ

ひと 勝 おも こんじよう しゅじよう

て人にすぐれんと思つて今生をわたり、衆生をたすけず、

ふぼ 救 こころ ひと じきほう ほう 食

父母をすくうべき心もなき人を、食法がきとて法をくらう

餓鬼 もう

がきと申すなり。

とうせい そう み ひと 隠 われいちにん くよう 受

当世の僧を見るに、人にかくして我一人ばかり供養をう

ひと くけん そう ねはんぎよう み

くる人もあり。これは「狗犬の僧」と涅槃経に見えたり。

これは未来には牛頭みらい ごず おにという鬼おにとなるべし。また人ひとにしらせ

て供養くようをうくるとも、欲心よくしんに住じゆうして人ひとに施ほごすことなき人ひと

もあり。これは未来には馬頭みらい めず おにという鬼おにとなり候そうろう。また在家ざいけ

の人々ひとびとも、我が父母わ ふぼ、地獄じごく・餓鬼がき・畜生ちくしようにおちて苦患くげんをう

くるをばとぶらわずして、我われは衣服えぶく・飲食おんじきにあきみち、
飽おんじき満おんじき

牛馬ぎゆうば・眷属けんぞく充満じゆうまんして、我わが心こころに任まかせてたのしむ人ひとをば、

いかに父母ふぼのうらやましく恨うらみ給たまうらん。僧そうの中なかにも

父母ふぼ・師匠ししようの命日めいにちをとぶらう人ひとはまれなり。定さだめて、天てんの

日月にちがつ、地ちの地神ちじん、いかりいきどおり給たまいて、不孝ふこうの者ものとおも

わせ給うらん。形は人にして畜生のごとし。人頭鹿とも申
すべきなり。

にちれん

ごうしよう

消

果

みらい

りようぜんじようど

詣

日蓮、この業障をけしはてて未来は靈山浄土にまいる

思

しゆじゆ

だいなんあめ

降

くも

べしとおもえば、種々の大難雨のごとくふり雲のごとくに

湧

そうちら

ほけきよう

おんゆえ

く

く

わき候えども、法華経の御故なれば、苦をも苦ともおもわ

にちれん

でしだんな

たも

ひとびと

こと

こんげつじゆうににち

ず。かかる日蓮が弟子檀那となり給う人々、殊に今月十二日

みようほうしよいうりよう

ほけきよう

ぎようじや

にちれん

だんな

の妙法聖靈は法華経の行者なり、日蓮が檀那なり、い

がきどう

墮

たも

さだ

しゃか

たほうほとけ

じつほう

かでか餓鬼道におち給うべきや、定めて釈迦・多宝仏・十方

しよぶつ

ごほうぜん

しじようきんごどの

はは

の諸仏の御宝前にまします。「これこそ四条金吾殿の母よ

はは どうしん とうぶ 摩 よろこ 褒 たも

母よ」と、同心に頭をなで、悦びほめ給うらめ。「あわれ、

こ われ しゃかぶつ 語 たも

いみじき子を我はもちたり」と釈迦仏とかたらせ給うらん。

ほけきよう い ぜんなんし ぜんによにんあ みようほけきよう

法華経に云わく「もし善男子・善女人有つて、妙法華経の

だいばだつたほん き じようしん しんぎよう ぎわく しよう

提婆達多品を聞いて、浄心に信敬して、疑惑を生ぜずん

じごく がき ちくしよう お じつぼう ぶつぜん しよう

ば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜ

しよう ところ つね きよう き

ん。生ずるところの処にて、常にこの経を聞かん。もし

にんてん なか しよう しようみよう らく う ぶつぜん あ

人天の中に生ぜば、勝妙の樂を受け、もし仏前に在らば、

れんげ けしよう うんぬん きようもん ぜんによにん み

蓮華に化生せん」と云々。この経文に「善女人」と見えた

みようほうしようりよう た

り。妙法聖靈のことにあらずんば誰がことにやあらん。

また云わく「この経きようは持ち難がたし。もししばらくも持たば、

われ すなわ かんぎ しょうぶつ 我は即ち歡喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごときの人ひと

しょうぶつ ほ は、諸仏の歎めたもうところなり」云々。うんぬん にちれんさんだん 日蓮讚歎したて

まつることはもののかずならず。「諸仏の歎めたもうところ

なり」と見みえたり。あらたのもしや、あらたのもしやと、信心しんじん

をふかくとり給たまうべし、信心しんじんをふかくとり給たまうべし。

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう きようきようきんげん 南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

しちがつじゆうににち 七月十二日

しじようきんごどのごへんじ 四條金吾殿御返事

日蓮 花押

四條金吾殿御返事